

第 46 回 スイス史研究会 報告要旨

ブルゴーニュ戦争期スイスの自己意識
柳澤伸一

日時：2004年7月17日(土)14時05分～17時55分

場所：日本女子大学 「百年館」3階 301会議室

スイスの自己意識にとって、神聖ローマ帝国(以下、帝国)との関係が重要であることは言うまでもない。通説に従えば、スイスの帝国からの独立は、1648年のウェストファリア条約を待って正式に承認されるが、すでに1499年のシュヴァーベン戦争に勝利することで事実上達成されていた。1474～77年のブルゴーニュ戦争も、この脈絡の中で、スイスが強大な軍勢力をもってヨーロッパの列強に伍す契機となり、独立に向けて土台を築いた事件と解釈されてきた。

しかし、スイスにとってのブルゴーニュ戦争の意義を理解する上で、見逃されてきた事実がある。それは、コンスタンティノーブルの陥落後、トルコの脅威からキリスト教世界としての帝国を守る責任が、帝国を担うドイツ国民にある、と広く考えられていたことである。その考えの広がりをもとにして、スイスは、ブルゴーニュ戦争を「西洋のトルコ人」=ブルゴーニュのシャルル突進公に対する十字軍と位置付けて、帝国を担うドイツ国民の一員として戦ったのである。この聖戦意識は、受動的に参戦した諸邦よりも、戦争を主導した諸邦、特にベルンに強かった。このように、ブルゴーニュ戦争期のスイスの自己意識にとって、帝国をキリスト教世界として理解する宗教的な帝国観が重要だったとすれば、ブルゴーニュ戦争を、スイスが強大な軍勢力をもって帝国からの独立に向けて土台を築いた事件として、主に軍事的に評価する通説には、見直しが求められよう。

さて、スイスがドイツ国民に属するのは確かだとしても、領邦君主のいない共同体的な国家の形成という独自の歴史を歩んだことも疑いない。そのスイス、特に都市邦の指導層を、敵対する者たちは、「悪い農民」と呼んで弾劾した。本来は社会の最下層にあって、抑制と慎みを掟に生きるべき者たちが、自ら支配者になって、神の秩序を覆している、と攻撃したのである。これに対して、都市邦の指導層は、「敬虔で高貴な農民」と自称して、反駁した。「敬虔で高貴」とは、本来、教会が騎士に対して支配者に相応しい資質として求めてきたものであるが、彼らは、支配者に相応しいのは、その資質をすでに喪失してしまった生来の貴族ではなく、むしろ、その資質を備える自分たちだ、と主張したのである。また、「農民」とは、ここでは、神によって定められ、神に喜ばれる仕事に勤しむ存在、「有力な者を無力な者にするために」神によってあえて選ばれた存在との意味で用いられており、彼らは、自分たちがそのような評価に与る存在である、と主張したのである。このことから、当時のスイスの自己意識にとって、政治秩序に関する宗教的観念が重要であることを確認できる。